

世羅郡遺族会

世羅郡遺族会の概況

戦前戦中の世羅郡の行政は十三カ町村で明治以降の戦没者は忠魂碑、招魂社等に祭り、桜花咲く四月盛大なる招魂祭を町村主催で在郷軍人会等の協力で挙行され、協賛行事として草競馬が行われ村を挙げての盛事であった。戦後神道指令が出され公人の立場で宗教的式典をもって慰霊祭を行うことが禁止されたので各町村共に社会福祉協議会等の民主団体に於いて行なわれて来た。終戦五ヶ年の歳月が流れ、ようやく遺族援護の声がおこり、昭和二十五年九月二十四日甲山町、同九月二十六日に東大田村が町村の支援に依って、遺族同憂の誼を以て相互扶助、慰藉救済、自力更生の道を開き共に相携えて平和日本建設に邁進する目的のもとに遺族会が結成された。之にしたがって郡下十三ヶ町村の結成を視るに至る。翌昭和二十六年四月、再度の会合協議の結果、世羅郡遺族厚生連盟が誕生するに至った。

世羅郡遺族厚生連盟役員

会長 山城 泰吉(早山町) 副会長 長谷川春秋(吉川村)
 理事 山根 哲(三川村) 理事 松本 数一(広定村)
 理事 瀬尾 義和(東大田村) 理事 向井 武夫(津久志村)
 理事 影久福四郎(神田村) 理事 平田 静一(上山村)

理事 大原 定(東村) 理事 大滝 礼二(大見村)
 理事 小林 順一(西大田村) 理事 田丸 徳平(小国村)
 理事 大原 俊雄(津名村)

世羅郡遺族会会員等調査表 (平成六年九月現在)

新町	支部名旧村	英霊柱数	遺族数	婦人部数	青壮年部数	会費	
						正会員	普通会員
甲山町	甲山町	一七	六	五	六	二,〇〇〇	三〇〇
	三川村	一五	一五	二	四	二,〇〇〇	三〇〇
	東 村	六	全	二	四	三,〇〇〇	三〇〇
	宇津戸村	七	一	六	八	一,〇〇〇	三〇〇
	計	四六	三	一七	二〇		
世羅町	大見村	一五	六	一〇	五	四,〇〇〇	〇
	津久志村	五	五	五	三	二,〇〇〇	三〇〇
	西大田村	一五	一	五	四	二,〇〇〇	三〇〇
	東太田村	三〇	一六	六	三	二,〇〇〇	二〇〇
	計	五三	一五	二九	一五		
世羅西町	小国村	九	九	三	一五	二,〇〇〇	三〇〇
	津名村	一六	一六	六	一六	二,〇〇〇	三〇〇
	吉川村	全	八	八	一四	二,〇〇〇	三〇〇
	山福村	五	五	五	九	二,〇〇〇	三〇〇
	計	二五	二	二一	二七		

■市町村遺族会の再編成について昭和三十年四月以降

昭和三十年市町村の統合に依って世羅郡を三町に再編成され、甲山町、世羅町、世羅西町に統合された。その際従来の広定村は、甲奴郡甲奴町に、上山村は双三郡三和町に、神田村は賀茂郡大和町に、大見村の一部が吉舎町へ。津名村の一字敷名が三和町に、吉川村の大字吉原が賀茂郡豊栄町にそれぞれ合併し、御調郡宇津戸村が甲山町に津久志村の一字山福田が世羅西町に合併した。合併後は三町の会長の内一名を郡会長に他の二名を副会長とし世羅郡遺族会と改称、十二支部はそのまま運営して来た。

会 長 城 泰吉(甲山町)
副会長 小林 順一(世羅町)
副会長 長谷川春秋(世羅西町)

■昭和四十六年役員改選

会 長	長谷川春秋(世羅西町)	副会長	金田 宣雄(甲山町)
副会長	小林 順一(世羅町)	理 事	城 泰吉(甲山)
理 事	原田 次郎(東)	理 事	光元 賢三(大見)
理 事	宮本 悟(東大田)	理 事	宮崎 正登(小国)
理 事	中村 定(山福田)	理 事	岡田 福一(津久志)
理 事	福岡 悟(津名)	監 事	高山 武雄(日川)
監 事	宮本 悟(東大田)	事務局長	福永 卓男(長田)

■婦人部の結成(昭和二十六年四月)

本部の十三支部に婦人部を結成し郡及び県本部との連繫を密にして補償運動等要求の九原則について努める。

田島サダノ(甲山町) 内海チヨ子(東 村) 國実於千枝(三川村)
平野 幸恵(東大田村) 野田 房子(大見村) 久井スユノ(西大田村)
山根ヨシ子(津久志村) 今元シズヨ(小國村) 竹広 光枝(津名村)
戸上富貴枝(神田村) 上本スギノ(吉川村)

■青年部の結成

昭和三十五年以降、英霊の崇高なる精神を継承し遺族会の目的遂行に努め将来の後継者としての資質の育成に努める目的をもって青年部を更に結成し各遺族会の若返りと活動の強化を計る。

郡 部 長 今田 春昭(世羅西町) 甲山町 三三人
郡 副 部 長 下住 優(甲山町) 世羅町 四七人
郡 副 部 長 松山 理人(世羅町) 世羅西町 三六人

計 一六六人

■年中行事

●慰霊祭 昭和二十年以降町村主催でなく民主団体の主催で甲山町は、郷友会、遺族会が、世羅町は英霊に應える会関係五団体、世羅西町は社会福祉協議会が主体となって、桜花香る四月神式仏式交互に執行。町長町民を代表して生前の武勲を讃え、英霊の真心を平和日本に生かすことを誓い遺族に中餐を供しアトラクション等で慰労する。

終戦記念日八月十五日お盆には、町と遺族会にて町内全英霊に燈明料を供える。

各支部ごとに忠魂録、過去帳に戦歴・英霊の写真を入れ永久保存し慰霊祭には祭壇に祭られる。

■運営資金

昭和二十五年頃の結成当初は、県交付金一万円、町村補助金十三万円、共同募金配分金六千円、計十四万六千円で出発した。

昭和二十六年より、各支部の遺族数に応じて一人当り会費七〇〇円、県会費六〇〇円、郡会費一〇〇円を徴集し、夫々の運営に充当して来た。

なお県本部より映画上映を受け遺族の慰安と運営資金の捻出を計る。又婦人部に毛糸、慰霊にローソク、線香の購買をなし助けとした。

■活動

遺族会の第一の活動目標は靖国神社の国家護持、第二が遺家族に対する補償たる年金、弔慰金の制度の復活、特に戦争未亡人の婦人部の窮状に対する国家補償等々について中央及び県の指導と助言を受け会の組織の強化活動に努めて来た。

- 衆議院厚生委員で遺族援護委員会委員長高橋等氏の創設期に於ける、助言と指導よろしく備後護国神社を中心とする、備後遺族連盟が結成され英霊の顕彰と遺族援護補償の道が開けて来た。つづいて永山忠則氏衆議院議員となり本会の指導育成に要望の貫徹に努めらる。

- 青少年義勇軍物故者慰霊式を執行

昭和六十三年二月十一日甲山町改善センターに於いて、世羅郡出身の青少年義勇軍に参加者一九七名中物故者六十一名の慰霊式及び参加者の親交の会を町村会、教育会、遺族会の主催で行う。

- 英霊の顕彰

慰霊祭は郡内三町が民主団体に委託して執行、又各支部遺族会が農閑期に執行、其他郷友会、傷痍軍人会、英霊に伝える会等で随時執行されて来た。広島県遺族厚生連盟主催第一回慰霊祭が広島市児童文化会館で昭和二十六年十月十九日行なわれ、午後遺族大会があり会長婦人代表出席した。

世羅西では終戦五十周年記念として町民一九となり「追悼の碑」を建設する。八月十五日除幕式。

- 忠魂碑等の扱い

郡内に忠魂碑、戦没記念碑、慰霊碑、平和塔、招魂社等が明治以降、旧村時代より建設されていたが戦後指令により公地にあるものは撤去を命ぜられたが移転再建され各支部ごとに維持清掃に努め、終戦記念日八月十五日等に供養祭を施行している。

■靖国神社団体参拝について

戦中は春秋の大祭に合祀される英霊の遺族は招待参拝されていたが、之が撤廃され久しきに渡っていたがようやく昭和二十六年県遺族会主催で決行され世羅郡よりも参加した。爾来備後遺族連盟の主催での団参を度重ね昭和三十年代は世羅郡主催で単独で決行、東京靖国神社に参拝後皇居、国会議事堂、市内見学について日光の観光、帰途京都西本願寺に参拝するコースを基本として決行した。当初は列車も不備で、

座席を板でつなぎ通路に新聞紙を敷いて東海道線を夜行で往復した靖国社頭の対面は一生の念願であった。

昭和二十七年県は遺児の団参を計画し、中学校二年生を対照に二年度に渡り決行。本郡より十六名、第二回目も十六名が参拝した。

郡主催で隔年三年ごと、決行、仙台松島に長野善行寺に、伊勢等に旅程を変更して実施した。応募五百に余る旅団をバス運行で富士五湖巡りをした事もあり、英霊のお陰で楽しい旅が出来ると喜ばれている。

■備後護国神社団参等

広島県には護国神社が二社ある。昭和二十七年頃より原爆で焼失した広島護国神社の再建、招魂祭の復活運動がおこった。時の県会議長小谷伝一氏が護国神社を統合し一社にする様提案された。

福山は歩兵四十一聯隊があり備後の英霊は福山に祭られる慣例になっていると主張、福山市長藤井正男氏は市会議長や桑本宮司を地方に派遣して了解と協力を得る事もあり世羅郡は福山に変更決定した。こうした事もあって深安の北村新之助氏等の協力により備後遺族連盟が結成され護国神社も整備された。

春の大祭には郡役員支部代表が参拝し、秋の大祭には三町それぞれ、バスを仕立てて遺族の参拝を助け、全町民の灯明料を集めて奉納している。備後遺族会館も出来、神社の維持管理に奉賛会結成をなし、遺族会活動に於いても福山分館として県本部活動の推進に協力している。

■遺族会研修等の行事

郡遺族会は三町の会長、婦人部長、青壮年部長に十二の支部長、婦人部長をもって組織して年三回定例集会をなし活動の計画、実践、反省、中央、県の情報伝達協力と常に遺族精神の高揚に努めて来た。

●郡下関係団体（郷友会、傷痍軍人会、原爆協議会、神社総代会）の役員との協議会を開いて、英霊に應える会を強化し、英霊の顕彰、靖国神社問題、国旗、国歌、大東亜戦争等、今日の問題について協議し正しい日本の心振興育成に努めている。

■郡内の忠魂碑、招魂社（等の調査）

項目	旧町村、支部	忠魂碑	平和塔	記念碑	招魂社	氏神・合併社
町名	甲山町	四	三	二	二	二
	世羅町	四	二	二	二	一
	世羅西町	四	一	二	二	二
計		一二	五	一	六	二

世羅西町は五十年記念に慰霊碑建設を計画中。

世羅郡遺族会役員表（平成七年一月現在）

会 長	堀 健太郎	副会長	宮本 悟、榎原 真詞
婦人部長	竹広 光枝	副部長	浦谷ミチエ、光元 秀代
青年部長	今田 春昭	副部長	下住 優、松山 理人
監 事	藤井 正雄		斉良 茂樹

世羅西町慰靈祭



甲山町戦没者慰靈祭



世羅西町小国地区招魂社





靖国团参記念（皇居前、世羅郡遺族会、S 54. 10. 29）



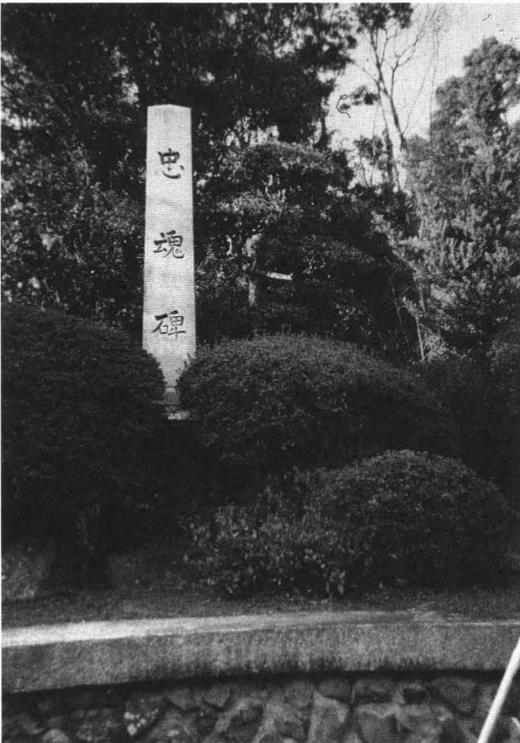
旧甲山町戦没者勒石碑（S 29. 9 建立）



世羅郡甲山町伊尾 風林寺境内
 在郷軍人会三川村分会建立
 (S11・10)

忠魂碑

帝国在郷軍人会東大田分会
 世羅町本郷明善寺境内 (T13. 5 建立)



從軍記念碑

甲山町伊尾 井原八幡宮境内
 (M36. 10 建立)



世羅郡遺族会 (於靖国神社、S57.11.18)



靖国团参記念写真 (旧甲山町班、S30.11.24)



世羅郡遺族会靖国神社参拝記念 (世羅町班、S62.10.27)



備後護国神社春季招魂祭参拝記念 (H5.5.8)



明治33年旧世羅郡戦没者忠魂碑前で甲山支部遺族のお盆掃除記念（S58. 8. 5）



陸軍少尉 新谷繁雄村葬写真（旧三川村、甲山町）



世羅郡遺族会、護国団参記念（三川支部、S 32. 11. 24～30）



戦争犠牲者追悼の碑
（世羅西町）



武運長久の日の丸旗

支部長 内海 正明、保水 勝美、藤井 正雄、有津 嘉文、

上根 寅雄、田丸 涉、服部 政雄、長谷川春秋、

栗藤 正義

婦人部長（支部） 茶谷 市代、橘鷹ツル子、松崎モモヨ、峠越カツヨ

松原 正代、山丈 節、福永 美雪、松永イサオ

金剛 久子、井上フジノ

望郷のねがいむなく

世羅郡世羅西町長 平野 節 美

ひたぶるに故郷恋う心残しつゝ夕雲燃えて今日暮れんとす

今日もかも熱は下らず母の待つ故郷へ還りし夢を見続け

これは一兵士の短歌であるが、ふるさとへの思い募らせつつその思い、
ついに叶わず、異国の土に埋もれていった、声なき声の二百五十万戦士
者の等しく死の際まで抱き続けた望郷の思いでありましょう。

あれからもう四十九年、この世に生を受け人間として与えられた一期
の人生を、駆け抜けるようにして征き、還らぬ人となった出征兵士。

お父さんやお母さん、弟や妹、子ども、愛する人、生れ育まれたふる
さと……、そんな祖国の難を、自分が死ぬことよって救おうと、純粹
一徹、果敢に散華した愛国の尊霊。

「俺達の苦しみと死が肉親や恋人の為に、祖国の為に、少しでも役に
立つのなら……」とスコールの如く銃弾降りしきる戦火の坩堝の中に、自
ら進んで一命を投げうった尊霊を思うとき、身のふるえる思いがする。

今ここに神前に額づき尊霊を招魂する肉親の為に、そしてわれわれ同
胞の為に、生命短くこの世を去った尊霊の魂の証を、この世に生ある限
り、同じ昭和を生きて、ここに残された者の使命として、愛惜し、追悼
し、次代に語り、記し、戦争を知らない子々孫々に伝えたい。

春らんまん、桜咲く下に酔い、歌い、踊る——、この満たされた平安
こそ、ふるさとの明日を夢み戦いついに異郷に生命絶えた三百八十五柱
の尊霊の生命の代償に在ることは、五十年、六十年、七十年と年月を重
ね、そして永遠の時を刻むとも消え失せることはない。いな日本の歴史
の続く限り消してはならない。

戦後焦土の中で人々の口にうたわれた望郷「異国の丘」。今日も暮れ
ゆく異国の丘に、友よつらからせつなかる、がまん黙ってる嵐が過ぎり
や、還える日が来る春も来る。私はこの世羅西の台地を蹴って四囲生き
とし生けるものがすべて芽吹く春が来れば、必ずこの「異国の丘」の歌
詞を口ずさみ、そしてうたう。それはふるさとの春を夢みつつ望郷の思
いせつなく、異郷の地に果てた尊霊の生命の代償によって、今日こうし
て、ふるさとがあり、私が存在することを胸底深く刻み、確かめるため
に——還らぬ三百八十五名の尊霊が死と対峙して、はるかなる異国の地
に思ったことは何であつたらうか——。人間誰しも生に未練のないはず
はない。生まれ育まれたふるさとの山、川、田園風景。父、母、妻、子
ども肉親、そして愛する人。これらを死の代償として、生への執着、生
への希求を断つたに違いない。戦没者並びに原爆死没者のご遺族を助け、
励まし、そして手をとって共にわが世羅西を興しより前進させ住み
よい町にすることこそ、生命短く望郷の心燃やしつゝ異国の土と化した、
尊霊の願いに応えることであると固く信じ、町土建設に懸命の努力をし

てゆくことを誓うものであります。ここに四千六百余町民と共に尊霊を深く追悼する次第であります。安らかに御霊をしずめられんことを――。

平成六年四月二十四日 さくら風に散る日

右の「慰霊の辞」は町長が祭典に奉読したもので、毎年町公報誌にのせて一般町民に英霊顕彰の思想高揚に努めつつある。

父の想い出

世羅郡世羅町青壮年部長 松山理人

戦後も既に半世紀、当時の記憶も次第に色あせて来ましたが、幼い頃の日々をたどって見たいと思います。あれは昭和十九年の夏だったと思う。上の畑で多分「そば」か何か種まきの準備をしていた時に村役場の人々が赤紙を持って来られた。それを受取った父の顔が一瞬曇って舌打したのを仲介した子供のぼくは記憶している。父はそれ以前にも福山の兵舎で二、三年の訓練入営を終えて一年ばかりがたっていた。陸軍衛生上等兵だった。今度の徴兵令が敗色漂う戦地行きだと言うことは父にはよく分っていたのだと思う。そんな父の気持を知ってかどうか分りませんが見送りの時祖父の手を振り切って父を追ったぼくは皆に取りこまれ家に連れ帰えされ布団の上に泣き伏せ寝入ってしまった。昼下りの目覚めた時の空ろな気持は今も忘れない。父からはその後多分十二月の末だと思いがハガキが一枚届いたきりだった。フィリピンのマニラ近郊に無事着いたが連日の爆撃で苦戦を強いられ生きては帰れないとの自覚からか！ 私に母や祖父母妹たちのことも託した結びになっていたことを記

憶している。

父の戦死の公報は敗戦の二年後昭和二十二年ぼくが小学五年生の時だった。半ば覚悟していたとは言え母や祖父父母の落胆は大きかったが年若い祖父父母と四人の幼児を抱えた母の苦労は測り知れないものだった。朝は朝星、夜は夜星で夕食後も田んぼに出かけて「はで」掛けなどする母をぼくからも手伝ったがそれからの人生の全てはぼく達四人の子供のために費されたと言っても過言ではない。今母は八十才健在である。そして我家の御意見番であり、精神的支柱でもある。せめて晩年は心豊かで安心な日々を送ってもらいたいと願っている。

私も小企業を経営し、町政に参画させてもらっていますが、常に困難や失意に見舞われる。そんな時いつも私をふん起させてくれるものは父や母の頑張りぬいた姿である。これからもそれを大切に生きていきたいと思っています。

悲しき終戦

世羅郡世羅西町 竹広光枝

むし暑い朝だった。八月六日勤めにゆく田の畦道を急いでいる時西の空がピカッと光った。今日は朝から雷が鳴るのかと思つて事務所に急いだ。その一日は何もわからなかったが夜から翌日になって「広島がやられた」と次々にひどい報せが伝えられ、数多くの負傷者も送られて来れる有様、張りつめた気力も不安と恐怖におののく日がつづいた。まして八月十五日終戦の放送が流れた。歩く力も動く力も失せてしまった。

みんな泣いた、泣いた、茫然としてしまいました。

私の夫はすでに二年前に戦死の公報を受けていました。「生還は期せず子供をたのむ」とのかんたんな葉書を最後に南方に向ったまま還りませんでした。

残された子供を育てこの戦いは絶対に勝たねばと日夜張り切って身心とも頑張っていた毎日でありました。

本当に悲しい終戦でありました。それでもいつまでも泣いてばかりいられない戦後の社会でした。物資の不足、食糧の不足、不安定な経済情勢の中に投げ出された戦争未亡人。女の細腕に子女をかかえてあえぐ姿は実に哀れで見るに堪えられないものでした。この時、境遇を同じうする同志が一堂に会して共に泣いて共に語り、そうだ私達が力を合せようと立ち上ったのが未亡人会の起りでありました。各所にこの運動が起りつつありました。若くして夫を国に捧げた者同志の集い、それはそれは悲しくもたくましいものでした。私はその先頭に立ってあらゆるものに挑戦しました。

日本の平和、東洋平和のためと信じて尊い生命を国に捧げた勇士の精神に従って生き抜き、日本の母として子女を強く立派に育てようと結ばれた母達の決意は涙ぐましくも熱い集いでありました。この未亡人会も年月を経て尚強く生い抜き集いとして現在の全国未亡人会につながり、その一部を遺族婦人部として今日に至り私達遺族の心のよりどころとして共に生きつづける会として大切に居ります。こうした会員の強いつながり、あくまでも生き抜く力をして社会の一員として認めて下さったものか各種の役職を賜り何かとお世話させて頂きことに強く感謝している今日であります。

終戦、以来半世紀の歳月が流れました。世は大きく変り人々の考え方も変っている今日でも私達戦争未亡人には、あの日、あのままに思い出は今も強く強く生きつづけています。

戦争勃発以来出征兵士の留守宅を守ったあの淋しい苦しさ、日の丸の旗を振って泣いて送った出征兵士の姿、戦死の公報を受け取った時のあの想い……等々でも勝たねばならぬと女ながらも鉢巻を巻いて山を掘り原野を耕して食糧増産に邁進した日本国民がみんなでむかえた終戦はそれはそれは悲しいものでした。

いつ想い出しても涙がこみ上げる想いでありました。

遺族の誰もが胸いっぱい思いを秘めてむかえられるであろう五十回忌にあたり同じ想いで在りし日を偲び遺族の皆様と心を通わせて居ります。

いつの日かに公報は受取りつつもあの大陸の奥に、又南海の果に、孤島のジャングルにもしや、もしやと想いつづけて来た妻は私だけではなかつたでしょう。